

希望のマラソン

カナダには、テリー・フォックスという英雄がいます。

テリーは1958年にカナダに生まれました。学生時代はバスケットボールの選手として活躍するほど、スポーツが得意な若者でした。しかし、彼は18歳で骨肉腫こつにくしゅという病気に冒されてしまいます。当時の医学では治療が難しく、命を助けるには、病気のある右足のひざから下を切断するしかありませんでした。

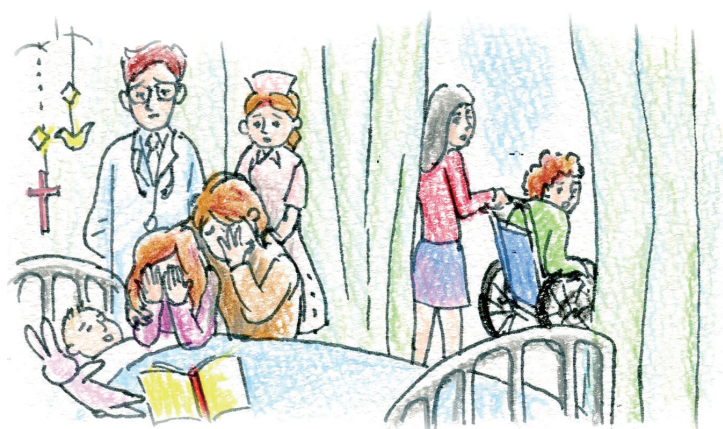
希望に満ちた未来が一転して、片足を失い、病気とたたかう日々が始まりました。テリーは自分の運命を悲しみ、絶望にくれました。しかし、治療を続ける病院には、さらに過酷かこくな現実があったのです。

テリーが病院で見たこと——それは、自分より幼い子どもたちが、テリーと同じような病気に苦しみ、命を落としていく姿でした。幼くして命を終えなければならぬ、たくさん子どもたちを見て、テリーはどんなことを思ったのでしょうか。

病気により失われるたくさん命——。そして今、助かった自分の命——。

テリーは、大きな決意をします。

三年後、テリーはカナダ東端の地、セントジョーンズに立っていました。テリーの決意とは、義足の右足で、カナダを横断するマラソンに挑戦することでした。自分が走る姿で、病気に苦しむ人を勇気づけるために。そして、病気を研究するための寄付金を集めるために。カナダをマラソンで横断しながら、出会う人々から寄付金を集めるのです。テリーはこの挑戦を、「Marathon of hope (希望のマラソン)」と名付けました。



8000 km 以上の道のりを、何ヶ月もかけて、そして義足で走りきること
は、不可能としか言えないことでした。しかし、家族や友人、支えてくれる人た
ちに見守られながらテリーの「希望のマラソン」が動き始めました。テリーの強
い意志は、どんな障害も寄せ付けませんでした。目標は完走すること、100万
カナダドルの募金を集めることです。一人が一ドルずつ寄付すると、カナダ全体
で100万ドル集まる計算になるのです。

希望のマラソンが始まったときは、誰も反応してくれない町もありました。残っ
た右ひざと、義足のつなぎ目からは血が流れ、義足でのマラソンは体を容赦なく
痛めつけます。それでもテリーは、黙々と何十kmのマラソンを続けていきま
した。「いつか必ず分かってもらえる。」自分を信じて、雨の日も、風の日も、走り続けました。

そんなテリーの挑戦は徐々に国民に知られていくことになりました。テレビなどで取り上げられたこともあり、テリー
を応援する声は日増しに大きくなり、ついにはカナダ中がテリーを大声援で迎えるようになりました。テリーが発し
た一人の希望が、カナダ中に希望を与えだしたのです。

順調に走り続け、スタートしてから4ヶ月後、テリーはコースの半分以上を走りきりました。ゴールすることも夢
じゃない、そう思えるところまで進んだのです。しかし、1980年9月1日、5372 kmを走ったところで、テ
リーの挑戦は終わりました。そして、カナダ中が大きな悲しみに包まれました。テリーの病気が肺にまでうつり、こ
れ以上走ることができなくなったのです。

テリーは自分のことよりも、寄付が目標に届かないことをなげきました。

そんなとき、今度はテリーを見てきたカナダの人たちが立ち上がりました。テリーを応援する五時間ものテレビ放



送がなされたのです。そのテレビ番組で次々と寄付金が集められ、実に目標の十倍、1000万カナダドルが集まりました。

テリーは、

「カナダ中の人たちが自分の意志を継いでくれたみたいだ。」
と、心から喜びました。

集まったお金はほぼすべて病気の研究のために使われ、テリーはカナダ最高の栄誉とされる、「カナダ勲章」を、史上最年少である二十二歳で受章しました。テリーは病気と必死に闘いましたが、病状は悪化していき、1981年の6月23日、テリーはその短い生涯を終えました。わずか二十二歳でのことでした。

しかし、「たとえ肉体は死んでも、僕の魂は生き、夢に挑戦し続ける。」という言葉を残したテリーの想いは、言葉通り、カナダ中の人々へ、そして、世界中の人々に受け継がれました。テリーの死後、すぐに「テリー・フォックス・ラン」というマラソン大会が開かれ、350万ドルの寄付が集められました。また、「テリー・フォックス財団」も設立され、今では世界六十カ国以上で、「テリー・フォックス・ラン」が行われています。これまでに財団が集めたお金は、4000万ドルを超え、テリーを苦しめた病気の研究に使われています。

2005年、希望のマラソンを続けるテリーの姿が、カナダの1ドルコインのデザインになりました。カナダ人がコインのデザインになるのは、テリーが初めてのことでした。

テリーの片足を奪い、運命を変えた骨肉腫の治療法も研究され、昔は助からなかった命も今では助けられるようになりました。彼の勇気ある行動が、今は多くの幼い命を救っています。テリーの想いは、今も世界中の人々の中に生き続けているのです。

(野村 宏行 作)

希望のマラソン

(高学年 3-(1))

(1) ねらい

生きることの尊さや気高い生き方のすばらしさを感じ、
自他の生命を尊重して生きていく態度をはぐくむ。

(2) 資料の特質

カナダの英雄テリー・フォックスを題材とした自作資料である。骨肉腫に侵されたテリーは、自身がチャリティーマラソンをすることで、ガンに苦しむ子どもたちを救おうとする。志半ばで、テリーの命は尽きてしまうが、テリーの意志をついで、カナダ中が立ち上がる。テリーの気高い生き方にふれながら、生命の尊さについて、じっくりと考えを深めていきたい。

(3) 展開例

- 1 命という言葉から、どんなことをイメージするか考える。
- 2 資料「希望のマラソン」を読んで話し合う。
 - ①「希望のマラソン」から、どんなことを強く感じたか。
 - ・子どもたちのためにがんばるテリーはすごい。
 - ・テリーの思いを受けて、立ち上がったカナダの人たちに感動した。
- 3 テリーのメッセージを受けて、命について感じたことはどんなことか。
 - ・勇気をもって生きること。
 - ・限りある命だからこそ、大切にしたい。
- 4 教師の説話を聞く。

(4) 指導上の留意点及び工夫

高学年になると思考の幅や深さも広く、深くなっていく。時間をとって、自分が資料から感じたことをじっくりと考えてから、話し合っていきたい。自己の内面に向き合う時間を確保し、それを基に話し合うことで、児童は自分の思いやこだわりをもって話し合いを進めていけるだろう。他者理解を深めていくとも重視したい。また、児童の問題意識から授業を始めることで、「自分たちで授業を創っている」という意識が児童に生まれ、主体的に考えることができる。

〔本文イラストは東京学芸大こども未来研究所による〕